

# 府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報  
2009年 夏号 7月 8日発行/季刊  
発行人：竹内 章  
連絡先：府中市分梅町 1-20-3  
TEL 042-364-3428

## 第9回 レンゲまつり



水遊びって気持ちいい!

先ごろ発行された当会記念誌「10年のあゆみ」の表紙は色鮮やかなレンゲまつりの写真で飾られました。レンゲまつりは市民の期待のもとに当会のシンボリックな催しとなっています。まつり当日は30名以上の会員がスタッフとして参加し、まつりを盛りたててきました。

今回は長い間まつりにご協力いただいている5名の女性会員の方々から感想や提案や希望を述べてもらいレンゲまつりを振り返り、今後のことについても考えてみたいと思います。

### 1. 今年のレンゲまつり

今年は急な気温の上昇で、田んぼは一面のレンゲの花で埋め尽くされ、シロツメクサ・黄色の菜の花・薄紫の花大根花など色鮮やかな花々が揃った花飾りコーナーでした。ママとお子さんやおばあちゃまとのカップルが多い中、「入れてくださいって言うんだよ」と、今年はパパと参加された方も多かったように感じました。花飾りの輪にはなつかしさと新しさを感じる幅広い世代が入り混じり、心なごませる効果があるようです。(藤井由紀子)

今年は田んぼの中にはほとんど入れない状態でしたので、子どもたちが遊んでいる様子の写真が思うように撮れませんでした。

しかし、水を抜くために作った水路でビシャビシャになりながら心行くまで楽しんでいる女の子の姿が印象的でした。

(勝谷寛子)

前日の雨で田んぼが水浸しになり、今年のレンゲまつりは、やむを得ずイベントの規模を縮小して実施しました。中止したものは「草笛づくり・演奏」、「竹とんぼづくり」、「ネイチャーゲーム」、「出前落語」などいずれも人気高いイベントでした。また、最大の見せ場「蜂蜜の採取実演」は養蜂家の蜂が3分の1に減少してしまうというアクシデントで、実施できませんでした。このような悪条件が重なり、参加者も例年の半分程度となりましたが、のどかな風景の中で、それなりに楽しんでもらえたと思っています。

### 2. レンゲの栽培と開花状況

昨年のレンゲは大変な不作でした。同じ失敗は許されないと、実行委員一同考えられる様々な対策を実施してきました。そのおかげで害虫の発生も少なく、花の蕾も多く見事な花を期待していました。ところが4月上旬の気温が異常に上昇したため、レンゲが一気に開花し、26日のまつり当日はすでに下り坂という少々残念な結果となりました。

参考までに、1年間のレンゲ栽培作業を振り返ってみます。

今年は4月中旬からレンゲのピンク色の花が揺れて、見事なレンゲ田ができあがりました。これも、前年のまつり直後から害虫駆除のために段ボールを敷いたり、種まき後は発芽の状況を観察しながら、雨に備えて排水溝を掘ったり、まばらに生育したレンゲの花を移植したり、多くの手をかけた成果です。

(梅沢みどり)

#### <2008年>

- 5月 5日：レンゲの枝葉にあるタコゾウムシの繭をバーナーで焼却
- 5月17日：害虫捕獲のため、畔に段ボールを敷く
- 6月 5日：段ボール撤去  
(推定で1000匹の成虫を捕獲)
- 9月25日：レンゲ種まき(1回目)
- 10月28日：レンゲ種まき(2回目) 排水路掘削

#### <2009年>

- 3月 2日：レンゲ移植
- 3月15日：薬剤散布(トクチオン細粒剤)
- 4月23日：レンゲ田まわりの草刈り



新たに登場したコカリナの演奏

### 3. レンゲまつりのこれから

私がレンゲまつりに参加するようになって8回目になります。レンゲ田や近隣に色とりどりに咲き乱れる花で花飾りを作り、麦わら帽子に飾り、童心に帰って毎年楽しませてもらっています。休日の一、二日、レンゲの花咲く草地で親子で楽しく過ごす体験は乳幼児の心を育てるとても大切なものだと思います。私にはまだ孫はおりませんが、孫と一緒に楽しめるまで「レンゲまつり」を続けて欲しいと願っています。(伊藤順理子)



毎年、女の子に人気の花飾り遊び

レンゲまつりの対象は、就学前の子どもと小学生、付き添いの親というのが、今までのパターンでした。これをもう少し上の世代にも広げるための2～3の提案です。○布ぞうり作り…今年のパラの状態が良くなかったこともあり女性に人気の布ぞうりの追加。○古本市…マンガ、雑誌、文庫本などいろいろ。○せともの市…前もって声かけをし、当日持参してもらう。後の2つは、無料とするか、交換とするか…など。

ともあれイベントが多くなれば、会員の負担も増えるので、ハードルは高そうです。(内田久子)

レンゲまつりは「レンゲ田が広がる風景を残したい」という思いから始まり、今年で9年目を迎えます。市内のレンゲ田は2002年には9カ所あったものが、今年は4カ所になってしまいました。次にまつりのスタッフの高齢化で、機材の運搬等が負担になってきています。また、まつりは2年連続で、降雨により日曜日に順延されました。これにより参加人数が少なくなっています。市民の会はこれからも府中市内にレンゲ田を残す活動をしていきたいと思っています。しかし、レンゲまつりのやり方は再検討する余地がありそうです。

(梅沢みどり)

私たちの願いもむなしく、市内のレンゲ田は減り続けています。レンゲ田の存続は”高齢化によるレンゲ栽培農家の減少””窒素過多によるイネの倒伏被害”、”タコゾウムシ被害拡大”など多くの障害があります。特にタコゾウムシの被害は市内全域に広がっていて、レンゲ田を残す活動はこの問題が解決しない限り、当分の間断念せざるを得ないでしょう。害虫の発生が予測される作物を農家に勧めることはできないからです。

レンゲまつりは来年10回目を迎えます。10年ということは当時60代の方は70代になっています。レンゲの栽培は1年間きめ細かく面倒をみる必要があり、まつりの設営は重いものを運ぶなど相当の体力が必要です。今後スタッフの若返りを進めないと、今までのようににぎやかなまつりを続けていくことは難しくなるでしょう。市民の期待に応えてレンゲまつり続けるにはどうしたらよいか、検討する時期にきています。(野口道夫)

## レンゲまつりが絵本に

レンゲまつりが、9回目を迎え、絵本になりました。レンゲまつりに参加した子供達の、楽しい笑顔で一杯です。春の光りを受けた美しい写真で一杯です。レンゲ畑で一日が、この子供達の思い出の1頁に、残って欲しい。それは私たち大人の夢でもありました。

そして、「レンゲまつり」も、会員勝谷寛子さんが撮り続けた写真で、美しい絵本になって、消えぬ記憶となりました。

花売りじいさん／花売りに、  
お花は町でみな売れた。

— — — — —

花屋のじいさん／ゆめにみる、  
売ったお花のしあわせを。(金子みすゞ)

レンゲまつりを続けて9年。この会もいっばしの花売りじいさんになりました。レンゲ畑で戯れた、この子供達の、しあわせを夢にみましよう。

そしてこの絵本が、「みな売れる」と、もっといいのです。  
(梶島記)



JRP出版局 (1000円)

# 緑のカーテンをフシゼント

## 府中PFS、東京農工大 市教委の三者連携で

今、市立小中学校で「ゴーヤ」で「緑のカーテン」を作っているのをご存知ですか。

この「緑のカーテン」は、府中市教育委員会とNPO法人府中PFS(以下PFSと記載)と東京農工大学の三者の協力によって実現しました。この取り組みについて府中市教育委員会指導室の長井満敏さん、PFS理事の横田実さん、農工大生活活動支援センターコーディネーターの田中康友さん、ごみダイエツNOKO副ゼミ長の川口さんからお話を伺いました。

PFSは市内の事業者によって作られた団体で、幼稚園や小学校に花や野菜の苗を植える活動をしています。この事業を行なうにあたり、PFSでは農工大農学部園芸研究室の萩原勲教授のアドバイスを受けて、ゴーヤ栽培に必要なパイプ・ネット・土・肥料等の準備をしました。

農工大では、3月中旬から、卒業生から提供されたゴーヤの種をFMセンターの温室で育てる作業に取りかかり、約300株の苗を育成しました。また、ボランティアを呼びかけるポスターを掲示して、学生に参加を求めました。そして春休み中から、工学部の学生も含め、延べ45名の農工大生が参加して、PFSのメンバーと共に、33校の市立小中学校のネット張りが行なわれました。パイプの枠に張られたネットは、高さ5m、幅2mです。これを校舎の2階まで引き上げる作業はかなり骨の折れる作業で、PFSのメンバーである大工さんが活躍したとうかがいました。

### 参加した学生は・・・

ボランティアで参加した学生サークル「ごみダイエツNOKO」のメンバーから話を伺いました。ごみダイエツNOKOは、卒業生や市民から寄付された不要な家具や電化製品を新入生に提供する活動を行なっているサークルです。副ゼミ長の川口さんは「サークルの趣旨とは違いますが、この話を聴いて手伝うことにしました。

NOKOからは3日間4名が参加しました。初日は1校、2回目は2校に行きましたが、校長と教育委員会の方が立会い、PFSの方々と一緒にパイプの枠組み作りを手伝いました。卓球部や黒森もりもり倶楽部からも手伝いの人が来ていましたが、NOKOからのメンバーが一番多かったようです」と話してくださいました。



育ちはじめた若松小のゴーヤ苗。(6月19日撮影)

### 育ちはじめたゴーヤ

5月に行なわれたゴーヤの苗の定植は、学生が授業で多忙だったため、PFSのメンバー10名で実施。萩原教授に定植のやり方の指導を受け、苗約210株が植えられました。各校に配られたゴーヤ通信①では、発芽の様子が写真とともに紹介され、これからの「水やり」と「つるの生育」についてわかりやすく説明されています。ゴーヤは水を良く吸うので、晴れた日には、目安として1株に1リットルの水やりが必要です。農工大では、これからも時期に合わせてゴーヤ通信を配布する予定だとか。

白糸台の第四小学校のゴーヤは校舎の東側の歩道沿いに栽培されているので、通りがかりに見ることもできます。6月初めには1メートル弱の高さまで伸びて、黄色い花をつけていました。これから夏に向かい、どんどん大きく育って、つるが伸びて、たくさんの実をつけることでしょう。子どもたちも収穫を楽しみにしていることと思います。

これからどのように展開するのかその行方を注目してゆきたいものです。(梅沢みどり)

府中市の環境行動指針の重点施策に「学校のエコスクール化100パーセント」が掲げられている。校庭の芝生化とともに、こうしたNPOと大学、市教委の三者協力で緑化を進めること自体が素晴らしい。

しかし、各学校の様子を見てみて感じたことは、校舎に比べて、「緑のカーテン」の規模があまりにも小さすぎ、あるべき緑のカーテンとしての役割を果たそうにない様子は少し残念だ。株数、プランター、ネットそれぞれに改善の余地があり、全校に展開するよりモデル校を絞り込んで本格的に展開したほうが良かったのではないかと。(T会員の声)

# 河原に咲く花の観察会

## “絶滅危惧種”の解説も

「河原に咲く花の観察会」は、色とりどりの花が咲いて多摩川が一年で最も華やぐ5月に行われるのが恒例で、今年も5月23日(土)に、募集の25名を大幅に上回る37名の参加者と講師・スタッフ5名を合わせて 総勢42名で行われた。観察のコースは関戸橋を起点に下流に向かってまず水辺に近い低水敷の植物を観察し、左折して広域広場のある高水敷に上がり、“府中かぜの道”の土手下を進みレンリソウの群生地を見て最後は郷土の森南西角に至る約1.5キロだ。

今日の観察会の様子を書く前に、この観察会にはあまり他ではみられない二つの特徴があることを記しておきたい。一つ目は、講師の星野先生(東京農工大准教授)が実際に植物を手にとって、在来植物と外来植物の特徴や違いなどを説明したり、近年急速に増えている外来植物が多摩川の生態系に及ぼす影響などを解説してくれる。さらに見ることができれば、“絶滅危惧種”についても解説をしてもらえる。二つ目は、講師がとりあげて解説した植物全てに名札を付けていることだ。今日のように参加者が多い場合、花を見ながら講師の解説を直接聴けるのはせいぜい10名くらいに限られる。名札を付けておけば、講師の声が聞けなかった人も、解説された花の名前が分かるし、写真に撮って後で調べることもできる。さらに、参加者の最後尾で名札を回収しているスタッフのKさんが講師とは別の視点から植物の名の由来、特徴などをやさしく説明してくれる。

## 好評の“花の名札”

前置きはこのくらいにして…さあ先生と一緒に河原に降りてみよう！

先生が最初に見つけたのはタンポポ。「これは外来種のセイヨータンポポです。在来種の日本のタンポポと似ていますが、この苞がめくれて下を向いていると外来種で、在来種は苞がめくれないで上を向いたままです」

少し歩いてまた先生「ヘラオオバコですね。これも外来種です。葉っぱがヘラに似ているからヘラオオバコ…今多摩川ではこれが増えて在来種のオオバコはほとんど見られなくなりましたね」

そばにいた女性がつぶやくように「こんなに葉っぱが長いのにオオバコですか？子供の頃見たオオバコはもっと背が低くて葉っぱも丸くて可愛かったのに…」この間にも観察の列は少しずつ長く



草花の名前を記したカードが添えられ、参加者も分かりやすい

なっていく…。

先頭を歩いていた先生が突然しゃがんでその植物がよく見えるように手でまわりの草を押しやって「これはカワラノギクですね、絶滅危惧種で多摩川でも自生種はほとんど見られなくなりました」



草花を囲んで先生の説明を熱心にメモする参加者も

## 観察植物の半数が外来植物

私が考えるに…この上流150メートルあたりに、市民ボランティアが活動しているカワラノギクの保護区がある。冠毛のついた種子が風で運ばれてここで芽生えたようだ。あとで名札を回収して分かったことだが、結局今日はカワヂシャ、カワラノギク、ミゾコウジュ、カワラサイコ、レンリソウ…5種類もの絶滅危惧種を観察することができた。気温はグングン上がって29度近くまで…暑い暑い。

先頭集団が、きれいに草刈りされた広場の四本のクルミの木陰で休憩をはじめると、後続の人達もみな到着してお茶を飲みながらしばし談笑。近くのアシ原からケケシ、ケケシ…鳥の鳴き声。すかさずスタッフのOさん「あれはオオヨシキリです」さあ、もうひと踏ん張りだ。木陰を出て“風の道”の土手斜面を真っ黄色に染めるツルマンネングサを左手に見上げながら進み…、右側に目をやれば、草の茂みから浮き上がるように咲く美しいハナウドの花が…、こうしてついに今日の最後の観測場所のレンリソウ保護区に着いた。しかし、よく探すとレンリソウはあちこちに見られるが花が全くみられない。残念ながらレンリソウの花は来年に期待しよう。土手を上がって郷土の森南西角に全員が集合し、野口さんのお話があって解散。

今日は46種類の植物を観察して50%以上が外来植物だったので驚いた人も多かったのではないかな。参加者は半数が女性であとは男性と子供5人。総じて熱心な人が多く、講師の話真剣に聴く姿も印象的で、草花の知識に詳しい人も多かった。河原で足元のよくないところもあったが事故もなく終わったことが何よりだった。(佐伯郁男)

# はてしないアレチウリとのたたかい

アレチウリはウリ科の外来植物で「府中の植物ガイド昭和57年(1982年)1月」によれば、北米原産で昭和27年(1952年)頃日本に入ってきて以来、急速な勢いで広がったと書かれていますが、これは静岡県清水港でアメリカやカナダからの輸入大豆に種子が混入しているのが確認されたことによります。

また「日本帰化植物写真年鑑平成13年(2001年)9月第2刷」では「トウモロコシを覆って繁茂する」というきわめて旺盛な繁殖力をもっていることが紹介されています。

言葉を替えるなら、それはまさに侵略的な繁殖力といえるでしょう。トウモロコシは、ヨシよりもしっかりと立っていてしかも葉の付け根がしっかりしているので、ツバメのねぐらに向いているので、作付け面積が広ければヨシ原以上に「ツバメの集団ねぐら」になり得ます。アレチウリは、そのトウモロコシを侵略することで、ねぐらも奪うのです。

このようにトウモロコシのような頑丈な植物をも覆い尽くして枯死させる繁殖力と根が残る再生力から「まわりの在来種が根こそぎ駆逐される」として、2006年2月に駆除すべき「特定外来生物」に指定されました。

私にとってアレチウリの強力な侵略性を意識したのは多摩川河川敷に「ツバメの集団にねぐら」を発見した頃で、2002年頃だったと思います。目の前で現実になるとは思ってもみませんでした。

2005年7月末には台風による大雨の影響でアレチウリがヨシ原を倒してしまいました。そのためツバメはねぐらを失い、ヨシ原から逃げ出してしまいました。そして、翌2006年になってもツバメはもどって来ず、ツバメの集団ねぐらは現れませんでした。

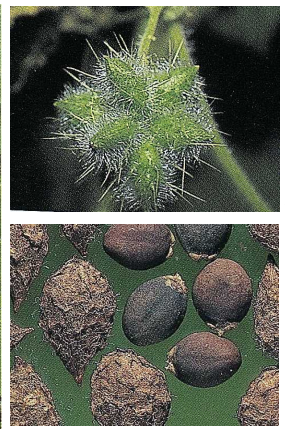
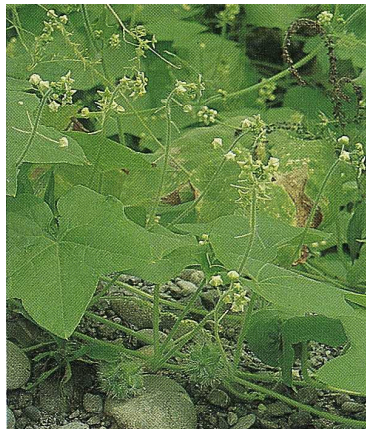
その頃の様子は当会の「会報2007年春号」に府中野鳥クラブ会長の大室氏の寄稿文に記載されているのでここでは述べません。



河川敷全体を覆い尽くし在来種を駆逐するアレチウリの侵略ぶり

私達は、2007年初夏に2回、2008年の初夏に2回のアレチウリ抜き取りを行いました。いずれも1万本～2万本と記憶しています。この作業はなにがしかの効果があったと思います。

2007年秋の台風は、この河川敷に残されていたアレチウリを洗い流して、2008年にはツバメの集団ねぐらが戻ってきました。



アレチウリの花と果実

アレチウリは上流から毎年種子を流してきます。今年も2回ほどアレチウリの抜き取り作業が行れるものと思います。

白い花をつけるアレチウリは雄花と雌花があり、8月から9月の花期の後に白いトゲに覆われた実がなる。繁殖力は凄まじく、1株当たり25,000個以上の種子をつける例も…。果実は長さ1センチほどで長くて鋭い棘が密生し、金平糖状にかたまっていて触ると痛く、棘は細くて硬くしなやかなので、作業服を貫くこともあります。

去る5月18日に府中野鳥クラブが下調査をした際にアレチウリを40数本抜き取ったそうです。

根本的な対策は種子が流れてこないようにすること、流れてきても地面に残らないようにすることだと思います。たとえば種子を焼くことが効果的だと思います。その他に府中市が行おうとする対策に期待したいと思います。

従って、真に効果が出るのはまだまだ先になると思います。現実には、何より多くの方々がアレチウリの抜き取り作業に参加することがアレチウリの侵略を防止することになると思います。ご協力をお願いします。

(田中正仁)

## アレチウリ駆除マニュアル

- 種を付ける前に抜き取る。
- できるだけ小さいうちに抜き取る。
- 1年に数回抜き取る。
- アレチウリが現れなくなるまで数年間続ける(6月から9月に計三回の駆除作業を数年間継続しないと効果が出ない)。

国土交通省千曲川河川事務所

# 今年も「身近な水環境の 全国一斉調査」に参加

調査日：平成21年6月7日(日) AM9.30～12.20 天候 晴

第6回目となった「身近な水環境の全国一斉調査」が今年も実施され、府中でも多摩川で調査を行いました。当会としては第1回目より、毎年6月の第1日曜日に実施しています。全国的にも、年々参加団体数が増加しており、昨年の参加団体数は997団体、調査地点総数は6241地点でした。

当会は6月7日に多摩川の府中管内の6地点で測定しました。午前9時30分、稲城大橋の橋脚下に会員4名が集合、測定方法・安全等の確認後調査を開始しました。調査結果は右表のとおりです。

|   | 調査地点名                       | 気温  | 水温  | COD平均<br>(mg/L) | PH  |
|---|-----------------------------|-----|-----|-----------------|-----|
| 1 | 稲城大橋下流(1号水再生センター)           | 24℃ | 20℃ | 8以上             | 6.8 |
| 2 | 東京電力鉄塔南                     | 27℃ | 21℃ | 6               | 7.2 |
| 3 | 大丸堰                         | 26℃ | 20℃ | 4               | 7.0 |
| 4 | 多摩郵便局南                      | 27℃ | 24℃ | 3               | 7.5 |
| 5 | NECニューライフプラザ<br>(2号水再生センター) | 27℃ | 21℃ | 6               | 7.0 |
| 6 | 府中グリーンセンター南                 | 28℃ | 22℃ | 3               | 7.7 |

## < 考 察 >

① COD値(化学的酸素消費量)、昨年と比較して、調査地点6地点とも水質が悪くなっている。 昨年の調査前は長雨が続き、当日多摩川本流の水量が多くきれいなためだった関係と思う。

② 稲城大橋下流は、COD8mg/L以上であったが透視度は良かった。

③ 多摩郵便局南の調査地点は川の流れが変わっていた。湧水は見れなかった。

④ NECニューライフプラザの調査地点は、水面上に泡が多かった。2号水再生センターの水処理の結果と思われる。

⑤ NECニューライフプラザと府中グリーンセンター南の調査地点では、稚魚が多く見れた。 稚魚を見ていると、心がなごむ。いたるところ釣り人が多い。

\* 参考 下水道法での規制値 PH 5.8～8.6  
BOD(生物化学的酸素消費量) 10mg/L以下

\* 河川の水質と魚の関係はどうであろうか。

水質汚濁防止法での河川の水環境基準は

水産2級 BOD 3mg/L以下(サケ・アユ等生息できる)

水産3級 BOD 5mg/L以下(コイ・フナ等生息できる)

となっている。

CODとBODの関係は、BODはCODに比べて小さく、CODのおよそ0.5～0.6倍です。ただ多摩川水系と荒川水系については、生活雑排水の関係でBODはCODより大きな値になります。

多摩川は笠取山に源を発し、溪流を下りダムを経て東京湾に注ぐ138kmの川です。多摩川周辺の住民には生活に密着した川であり、まだ自然が残されているので大切にしていかなければなりません。河川敷は市民の憩いの場でもあり、この水質調査を実施することにより、一般市民にも関心を持ってもらい、多少なりとも水質の監視と改善につながればと思います。  
(五十嵐四郎)



## 府中かんきょう市民の会が 10周年記念誌を発行

「NPO法人府中かんきょう市民の会」は今年の4月で発足満10周年を迎えました。会の活動も多岐にわたり、市民の方々からもようやくその存在が認められるようになってきました。

この10周年の節目として、10年間の活動を冊子にまとめ、記録として残しておこうとの願いを実現するため、昨年7月に「10年のあゆみ」編集委員会を立ち上げ、記念誌の編集をスタートさせ、今年の3月に完成をみました。

内容としては、会員の一人ひとりの会に対する思いや期待を「会員の声」として、また当会の活動をドキュメントとして掲載し発行を続けている「会報」を創刊号から全号を掲載したほか、「10年の活動記録」として会発足の1999年から年度ごとに「主な活動と出来事」と題して年表形式で掲載しました。

会員をはじめ、当会の活動にご理解とご支援を頂いている関係各位や各種団体にも配布・贈呈しました。是非ご一読いただき、ご感想など頂ければ幸いです。  
(10周年記念誌編集委員会)

# 5年目を迎えた田んぼの学校

今年の「田んぼの学校」は昨年の30名近い「抽選漏れ」を解消するため、農工大学の協力で「作付け面積」を増やした結果、募集枠を50名(昨年40名)とし、52名を迎えました。JCOM東京が「田んぼの学校」を放映してくれたからか市外からの反響もありました。これまでも小学校低学年の応募が多かったのですが、今年は更に、幼稚園・保育園など低年齢化の傾向が見られます。

学校授業で学んだ追体験のためや、保育園でもイネを育てるのでと参加した父母もいます。親子組のほか一般参加者も増え、両者を満足させる「学校運営」はスタッフにとって創意・工夫のしどころです。

## 開校式・代かき体験 5月30日 雨→曇

当日は雨のなか、生徒・父母62名が雨具着用で参加。新しくなった温室を借りての開校式では竹内理事長が「全7回を楽しみながら、体験しよう」と挨拶、農工大学の太里先生からも、今年も一緒に体験(指導)したいとの励ましの言葉を受けました。

田んぼ面積も広がったことから父母にも代かきに参加してもらいました。土を均一にする「トンボ」という農具を使う代かき作業に移る前に、泥に足をとられたり、靴下が脱げてしまった子どももありました。はじめて田んぼに入って重労働の「代かき」を体感しました。

「代かき」のあとは雨も上がった広場で“ふれあい交流”をしました。よりうちとけた雰囲気づくりのために大学生の伊藤さんが「はじめまして」というゲームをしてくれました。自己紹介したあと、好きな食べ物はなんですか? 生きものや植物を育てことは?・・・とコミュニケーションしながらカードにメモし、相手を変えて質問しながら、交流しました。続いてネーチャーゲーム「動物交差点」です。互いの背中に本人には知らせないで、動物名カードをつけて、相手からヒントを得て、自分の背中の動物名を当てっこするゲームで、大人も子どももゲームを楽しみました。(生徒37/父母25/スタッフ・取材23/総勢85名)

## 今年、初めて古代米を植える 6月6日 雨→曇

初回に続き雨天。参加者は前回より多く生徒・父母68名で、田植えはやはり人気があります。なかには子どもは参加できないので・・・とバケツ苗を受取りに来た熱心な父母もありました。田植えでは指導スタッフが不足で、チェコからの留学生が飛び入り参加してくれました。チェコには田んぼはないそうで、彼女は準備体操“ピョピョさん”でチェコ流のリード役を披露、皆を楽しませてくれました。

植える面積は大きくなったとはいえ、生徒と父母が東西両側のあぜから一斉に田植えを始めたのですが、一人一人の植える持ち場が狭かったことや、縄移動の人員配置など、段取りが不十分で参加者に不愉快な思いをさせてしまったこともあり、反省材料です。



5年目を迎えた「田んぼの学校」風景。  
5月30日の「代かき体験」(上)と、6月6日の「田植」。

はじめは田んぼに入ることすらたいへんだったのに、慣れてくると上手に植えられるようになりました。植えた苗は頼りなく見えますが、1カ月後の7月4日に生長した苗を見るのが楽しみです。その後、バケツ稲の植え方の実技指導のあと、「稲作の歴史と生活文化」のレクチャーも行いました。

1坪(1.8m×1.8m)という単位は、もともと一人が一日に食べる三合の米収穫の面積を表していること、イギリスの1ポンド(450g)も一日分のパン粉の重さであることなど、度量衡の単位に主食が深くかかわっていることも学びました。また「かかし」づくりのために古着を持参してもらうことや、次の「バケツ稲相談コーナー」への質問準備案内などを行い最後にバケツ苗と土と肥料を配って散会しました。

今回は、健康食ブームで注目の古代米を植えました。収穫祭で餅にして食べようと計画しています。ところが古代米ともち米のコガネモチを区別して植える予定のところ手違いで混植してしまい、これも反省です。餅つきには支障はないものの、収穫量比較ができないのが残念です(生徒43/父母25/スタッフ・取材19/総勢87名)。(進藤礼治郎)



## 日野市環境 情報センター

# かわせみ館見学記

高橋 和夫（会員）

日野市は環境に関する活動を総括的に推進する目的で「日野市環境情報センター」を設置している。このたび同市の環境活動の取り組みの中心となっている同センターを訪問しました。

日野市では、平成7年に市民の直接請求により環境基本条例が制定され、平成11年に市民ワーキングチームと庁内チームの協働作業で環境基本計画を策定。この計画の中で「環境情報センター」の設置が決められました。

平成17年7月、市が買取った旧日野市役所に隣接する元銀行支店だった建物に「環境情報センター」を開設。「センター」は2階建ての300平米で、1階は展示と情報収集のためのスペース。2階には20人ほどの会議室、事務室、印刷室などがある。

センター事務局は日野市環境保全課2名、嘱託職員3名で、今年4月からは当会顧問の小倉東京農工大名誉教授がセンター長として就任されている。

センターの役割は環境基本計画の推進拠点として位置づけられ、そのためにセンターには約50人の市民からなる「日野市環境市民会議」が設置され、センターを含む日野市環境保全課と協働運営している。ちなみに、市民会議のメンバーは年会費1000円を負担している。

市民会議には「くらし」、「大気・地球環境」、「水」、「みどり」、「ごみゼロ」、「環境学習」の6分科会があり、それぞれの分科会で検討された事柄については隔月の運営会議で報告される。これらの運営会議にはセンター事務局も加わって、円滑な運営が行われている。

センターが収集した環境に関する年度ごとの諸活動成果や統計を、NPO法人環境自治体会議...環境政策研究所に送り、センターとして毎年「環境白書」を発行している。「白書」には、日野市内の幼稚園、保育所、小中学校、民間企業から環境活動レポートが寄せられるなど、多岐にわたっているのが特長で、このことにより小中学校、民間企業とも、相互の活動を参考にしながら、一層の環境保全に取り組むという、よい相乗効果が生まれているという。

また「白書」には環境基本計画の推進状況とその評価も掲載されるなど、日野市環境情報センターが同市の環境問題の取り組みの中心になって活動しており、今後とも大きな役割を果たそうとしている。



### 日野市環境市民会議 の主な活動

- 浅川の水量減少問題
- 程久保川改修工事をめぐる問題
- 地産地消推進の課題
- 生活道路への通過車両抑制
- 放置自転車対策
- レジ袋有料化などごみ量多摩最少めざす取り組み
- 環境講座（月2回）開催
- 緑の環境マップ作り
- 小学生対象の省エネ取り組み調査

